

introduction

偽関節や変形癒合は、整形外科医が治療後の最も避けたい合併症の代表です。そのなかでも特に偽関節は、適切な治療を実施していれば避けられる症例と、最善の治療を実施したとしても偽関節になる症例があります。偽関節や遷延癒合の頻度は骨折部位によっても異なりますが、数%~10%に生じるとされ、レジデントの先生を含め整形外科医や外傷外科医の初心者から中級者までもが日常診療で遭遇することが多いため、「偽関節治療のエキスパートを目指そう」という特集を企画しました。

現在、臨床の最前線で活躍されている指導医の先生方にご協力いただき、初心者から中級者に向けて、エキスパートになるための基本的な重要事項、偽関節治療の基本、保存療法から手術療法までを網羅し、特に手術療法では、基本的な治療法の利点・欠点や最近の治療法のポイントをそれぞれのテーマに沿い、イラストや画像を多用してご執筆いただきました。読者にとって大変理解しやすい内容になっていると思います。

定義・原因・分類・診断では、増殖性偽関節と萎縮性偽関節の特徴など、治療の基本では、偽関節になった原因を突き止め、その原因を解決しタイプごとに治療法の決定や患者教育を含めた保存療法ならびに生物学的活性を上げるための工夫の必要性を概説いただきました。さらに、漫然と保存療法を続けることは避ける必要があり、手術療法では、偽関節部位を考慮したさまざまなインプラントの選択ならびに偽関節部の新鮮化や骨移植など併用手術の要否の決定と適切な手術手技の重要性を述べられました。部位ごとでは、見逃す可能性の高い手の舟状骨、日常遭遇する大腿骨骨折を取り上げました。トピックスとして感染を伴った偽関節治療に対するNPWT (negative pressure wound therapy) の併用やCD34陽性細胞移植など、新たな治療法と人工知能 (artificial intelligence; AI) を用いた遷延癒合・偽関節の予測などそれぞれのテーマに沿ってご執筆いただきました。

本号が、骨折ならびに偽関節診療の傍らに置かれ、読者の皆様の診療のお役に立つことを祈念しております。最後に、ご多忙のなかご執筆いただきました先生方に改めまして感謝申し上げます。

宮崎大学医学部整形外科
帖佐悦男